

# 父ちゃんの凧

長崎源之助

予習として

声を出して読みましょう。(音読)  
文の主語に \_\_\_\_\_、述語に \_\_\_\_\_ をひきましましょう。  
意味調べをしましょう。

授業中

わかったことを書きこみましょう。



- 1 どうです、りっぱな凧でしょう。 2 わたしの父が、作ったんです。
- 3 これ、わたしの、たからです。
- 4 わたしのいなかでは、男の子が生まれると、凧を作ったものです。
- 5 父は、魚屋でしたが、凧作りが大好きで、「近所や、お客さんの家で男の子が生まれると、凧作りをかって出たそうです。」
- 6 「どっちが本職だか、分かったもんじゃなかったよ。」
- 7 父は、凧をあげるのも大好きで、五月のお節句の凧あげ大会には、たたみ二まいぐらいもある大きなを作って、町のわかいしゅうとあげたそうです。
- 8 凧あげ大会が近づくと、父はもう仕事を手につかなくなったといいます。
- 9 凧のほねにする竹を山に切りに行ったり、それを組み立てたり、絵をかいたり、その紙をはったり、糸目を付けたり、しっぽを下げたり……。
- 10 しかたがないので、母が一人で魚を売ったり、さしみを作ったり、開きをほしたりしたんです。
- 11 父は、八幡太郎義家とか、源義経とか、武田信玄といった、よろいかぶどのいわゆる武者絵をかくのが上手でした。
- 12 「すみをたっぶりふくませた太い筆で、勢いよく、一気にかきあげる様子は、見ていて本当に気持ちよかったですよ。」
- 13 わたしが母のおなかにできた時、父はとても喜んで、生まれてくる子は、もう男の子だと勝手に決めちゃって、どんな凧を作ってやるうかと、うれしそうにしょっちゅう考えていたそうです。
- 14 ところが、生まれたのがわたしでしょ。 15 父がどんなにがっかりしたことか。 16 それでも、父は、

わたしのために凧を作ってくれたのです。

17 それが、この六角凧なんです。

18 父は、武者絵ばかりかいていたものだから、女の子向きの絵を知りません。19 考えに考えた末にかいたのが、この巴御前です。

20 巴御前は、女ながらもよろいかぶとに身を固め、なぎなたふるって、寄せくる敵を、ばったばったとなぎたおしたという、勇ましい人です。

21 父ったら、まるで、その凧の絵に合わせるみたいに、わたしに友江と名前を付けたんです。

22 わたしが生まれたころは、日本が領土ほしさから中国にせめこんで、その戦争が、だんだん大きくなっていました。

23 ご近所でも、八百屋のおじさんや、とこ屋の兄さんや、ゆう便屋さんなどが、さっそく兵隊にとられたんですって。24 そして、間もなく父も戦争に連れていかれちゃいました。

25 生まれたての赤んぼのわたしをかかえ、女手一つで魚屋をやらなければならなかった母は、どんなに苦労したかしれません。

26 ゴムの前かけをしめ、長くつをはいて、うるこのはりついたうでで、ときばきと魚を切る母、その背中でのけぞって泣いていたわたし、そんなすがたを想像すると、今でもきゅんとむねがいたくなります。

27 ところが、父きたたらん気なもので、兵隊として中国へ行ってまでも、凧を作っていたんですって。

28 そのことは、父が戦死した後、遺品をとどけてくれた戦友の青野さんから聞いて分かりました。

29 父は、中国の少年がむかで凧をあげているのを見つけると、すっかりこうぶんしちやって、それを手に取って見せてもらったそうです。

30 むかで凧というのは、小さな円い凧を何まいもつなげたものです。31 凧好きの父でしたが、む

かで凧を見るのは、初めてだったそうです。

32 凧は日本だけのものではなく、世界じゅうどこにもあるんだということを知った、父の感激はどんなだったでしょう。

33 父が糸の付け方や、凧と凧のつなげ方や、バランスのととり方などを、あまり熱心にいつまでも見ているので、少年は、凧を取られやしないかと心配したそうです。

34 戦地では、凧作りの材料を集めるのも大変でしたが、父の熱心に戦友たちも協力して、竹や紙やひもなどをさがしてくれたそうです。35 隊長さんまでが、絵の具を取り寄せてくれたんですって。

36 父は、あまりのうれしさに、なみだをこぼしたといっています。

37 父は、どんな短い休み時間ものがさずに、こつこつ働いて、五十まいもの凧を作ったそうです。

38 赤いよろいを着、なぎなたをかかえ、きりりとはちまきをしめ、目をつり上げ、口をきゅっと結んだ、美しい女大将の顔……それが五十まい。

39 「父ちゃんは、日本に残したあたしたちのことを思いながら、一まい、一まい、心をこめて、巴御前の、いいえ、友江の絵をかいたんだよ、きつと。」

と、母は、よく言っていたものです。

40 その凧をあげた時のその観さといったら。

41 戦友たちは、みんな手をたたき、隊長さんもその眼鏡でにこにこ見上げたんですって。

42 真つ青な冬の空にあがった五十まいの巴御前は、目鼻立ちこそ、少しずつちがっていましたが、どの顔もとてもかわいらしかったといっています。

43 巴御前の凧は、一日じゅうよくあがっていたそうです。44 戦友たちは、作業の合間に、それを見上げては、楽しんでいました。

45 国の子どもたちも、凧をあげているだろうか。46 おぶくろは達者だろうか。47 じいさんの神経痛

がいたまなければいいが……。

48 凧を見ながら、兵隊たちは、いろんなことを考えていたといいます。

49 夕方になって、父が凧をおろそうとした時です。50 とつぜん、一発の銃声がひびき、たまが父のむねをつらぬいたんです。

51 父は、その場にばったりたおれ、父の手をはなれた凧は、ひもを引きずりながら、どこまでもどこまでも飛んでいってしまったそうです。

52 遠い山なみのみねに雪がかがやいていて、巴御前の凧は、夕焼けにそまりながら、ぐんぐん小さくなっていったそうです。

53 わたしは、その凧を見たわけではありませんのに、それが今でもはっきり見えるような気がします。

54 子どものころは、父を殺したという中国の少年兵をどんなにうらんだかしれません。

55 でもね、今考えると、その少年兵がどんなに腹を立てたか、分かるような気がするんです。56 だって、敵の凧が、わがもの顔で、自分たちの空を飛んでいるんですもの。57 ひよっとしたら、その

人、自分の家族を日本軍に殺されたのかもしれないね。

58 敵も味方もなく、世界の国々のいろんな凧が仲良くあげられたら、どんなにいいでしょう。

59 父も、きつとそれを望んでいたにちがいありません。

60 この六角凧を見ると、顔も覚えていない父の、そんな夢が伝わってくるような気がします。

1 どうです、りっぱな凧でしょう。

2 わたしの父が、作ったんです。

3 これ、わたしの、だからです。

4 わたしのいなかでは、男の子が生まれると、凧を作ったものです。

5 父は、魚屋でしたが、凧作りが大好きで、ご近所やお客さんの家で男の子が生まれると、凧作りをかって出たそうです。

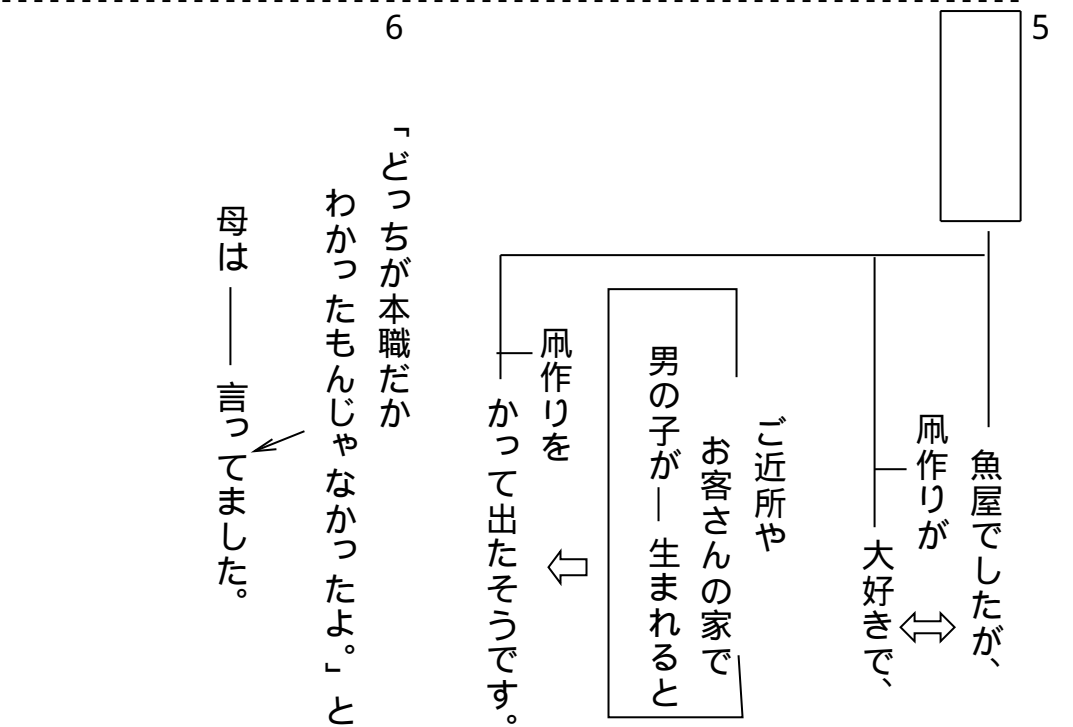
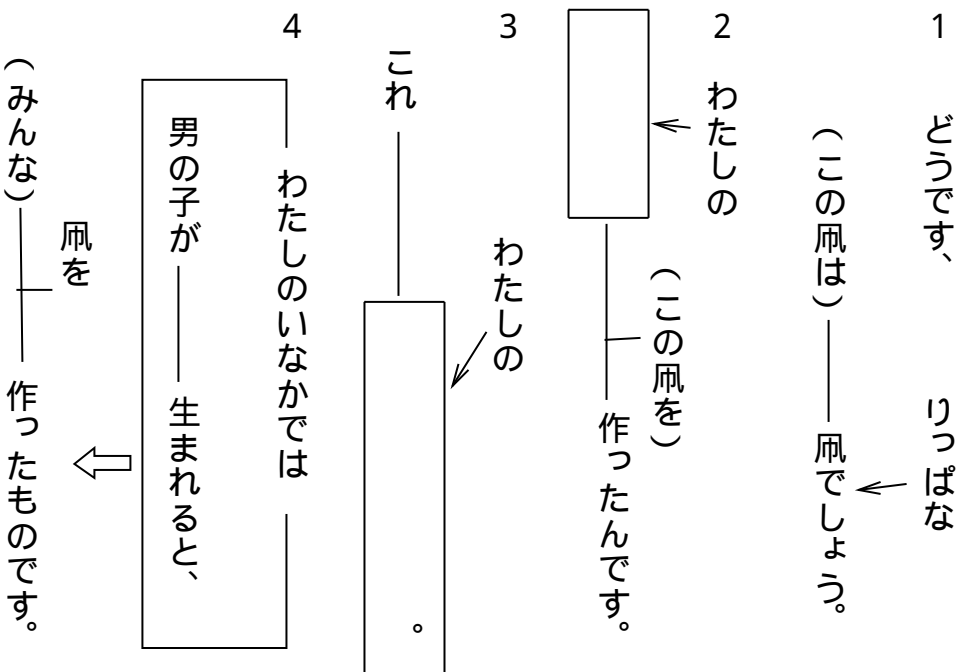
6 「どっちが本職だか、分かったもんじゃなかったよ。」と、母は言うてました。

意  
りっぱ

意  
いなか

意  
かって出る

意  
本職



**ことばの勉強**

さて、「こ」では、どの使い方がしてあるでしょう。

文 のです( ) んです( )

ア、理由や結果を説明する。

・ せっかくものがびしょぬれになりました。雨がふったのです。

イ、強めて言う。

・ ついに、ぼくたちは勝ったのだ。

ウ、人に教える。

・ この絵は、ぼくがかいたんです。

文 くしたものだ

繰り返しかえしあったできごとを思い出すときに使う。

・ 一年生のころ、ぼくたちはよくけんかしたものだ。

文 くすると

ア、きつかけをあらわす。本当の原因(理由)はかくれている。

・ 校長先生が来ると、みんなは静かになった。(どうして?)

イ、くすると、次のことがわかったことをあらわす。

・ わたしが家に帰ると、おばあちゃんが台所にいました。

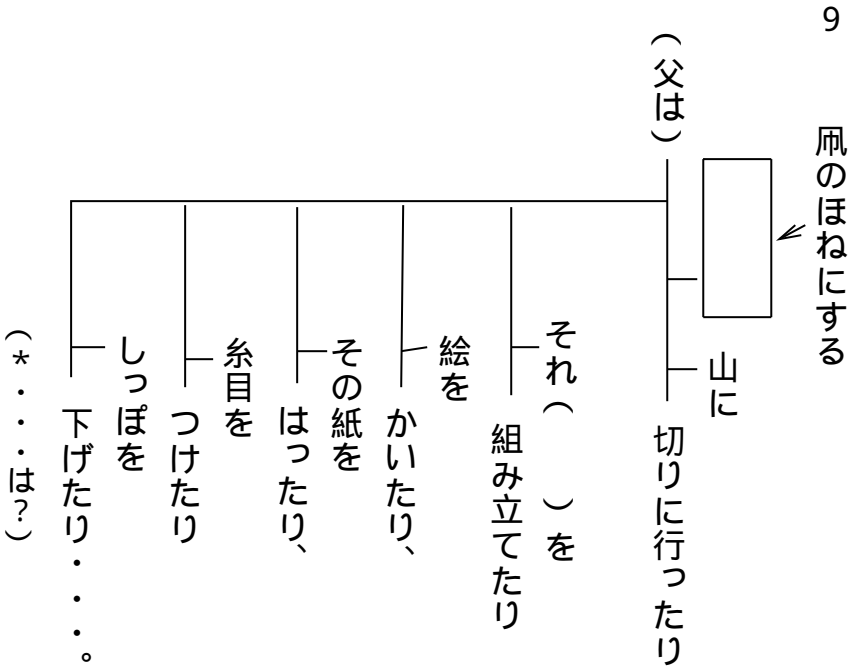
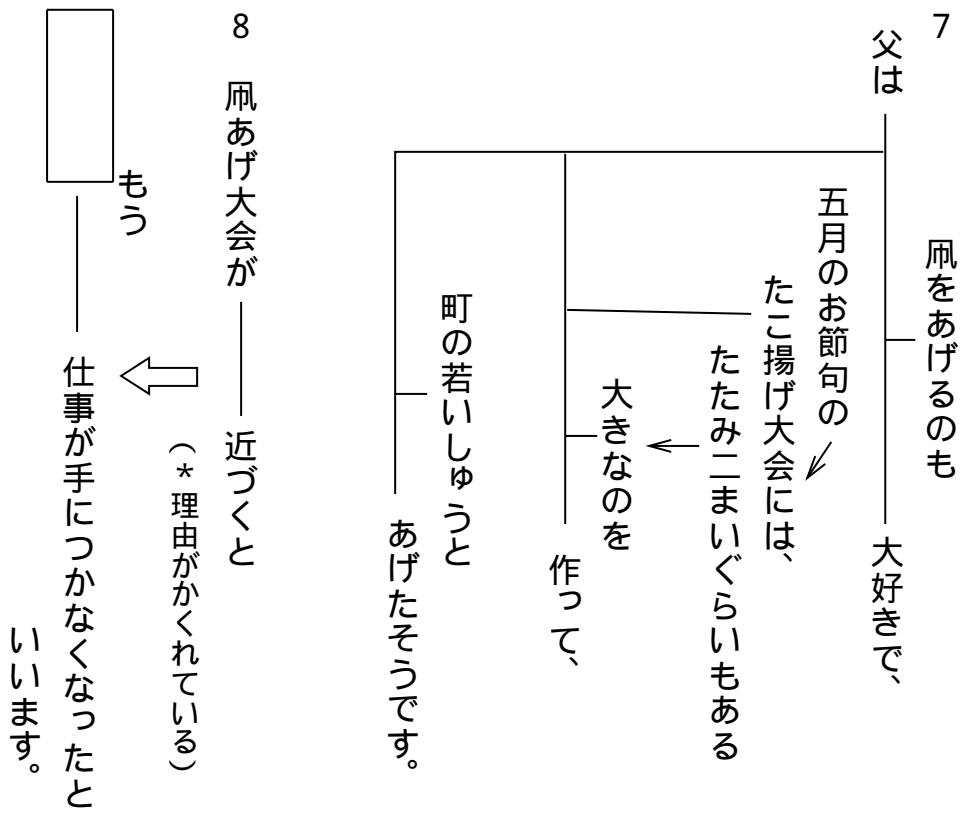
7 父は、<sup>たこ</sup> 凧をあげるのも大好きで、五月のお節句の<sup>たこ</sup> 凧あげ大会には、たたみ二まいぐらいもある大きなのを作つて、町のわかいしゅうとあげたそうです。

8 <sup>たこ</sup> 凧あげ大会が近づくと、父はもう仕事を手につかなくなつたといひます。

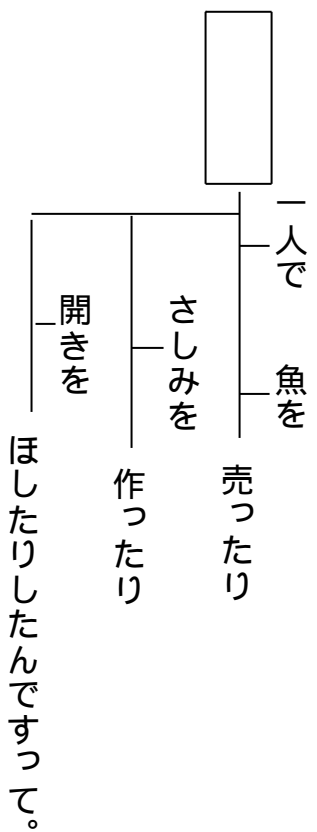
9 <sup>たこ</sup> 凧のほねにする竹を山に切りに行つたり、それを組み立てたり、絵をかいたり、その紙をはつたり、糸目を付けたり、しっぽを下げたり……。

10 しかたがないので、母が一人で魚を売つたり、さしみを作つたり、開きをほしたりしたんですって。

意	節句
意	若い衆
意	手につかない
意	糸目
意	開き



10 しかたがないので、  
←



ことばの勉強

文 くだそうです。くといひます。くだつて。  
人から伝え聞いたことをあらわす。

文 くしたり、くしたりする。  
代表例を二つ以上並べている。  
9と10は、同じ文の形ですが・・・。

11 父は、八幡太郎義家とか、源義経とか、武田信玄といった、よろいかぶとのいわゆる

武者絵をかくのが上手でした。

12 「すみをたっぷりふくませた太い筆で、勢いよく、一気にかきあげる様子は、見ていて本当に気持ちよかったです。」

と、これは、母の思い出話です。

意 よろい

意 かぶと

意 いわゆる

意 武者絵

意 一気

源義経とか

武田信玄といった

よろいかぶとの

いわゆる

をかくのが

父は

上手でした。

12 「すみをたっぷりふくませた

太い筆で

勢いよく

一気に

かきあげる

見ていて 本当に

様子は

気持ちよかったよ。」と、

これは

母の 思い出話です。

13 わたしが母のおなかにできた時、父はとても喜んで、生まれてくる子は、もう男の子だと勝手に決め

ちゃって、どんな<sup>たこ</sup>尻を作ってやるうかと、うれしそ

うにしょっちゅう考えていたそうです。

14 ところが、生まれたのがわたしでしょ。

15 父がどんなにがっかりしたことか。

16 それでも、父は、わたしのために尻<sup>たこ</sup>を作ってくれ

たのです。

17 それが、この六角<sup>たこ</sup>尻なんです。

意 しょっちゅう

文 〳〵してしまつ)〳〵しちやつ(

ア、終わることをあらわす

・ 今日中に、本を読んでしまつ。

イ、自分のしたことを後悔<sup>こうかい</sup>する

・ このガラス、ぼくが割ってしまった。

ウ、相手のしたことを注意したりしかったりする

・ きみがぼくのおやつを食べてしまった。

エ、予想になかったことで、ざんねんだという気持ち<sup>もち</sup>をあらわす

・ 友だちが帰ってしまった。

オ、とりかえしのつかないこと

・ 大雨で、家が流されてしまった。

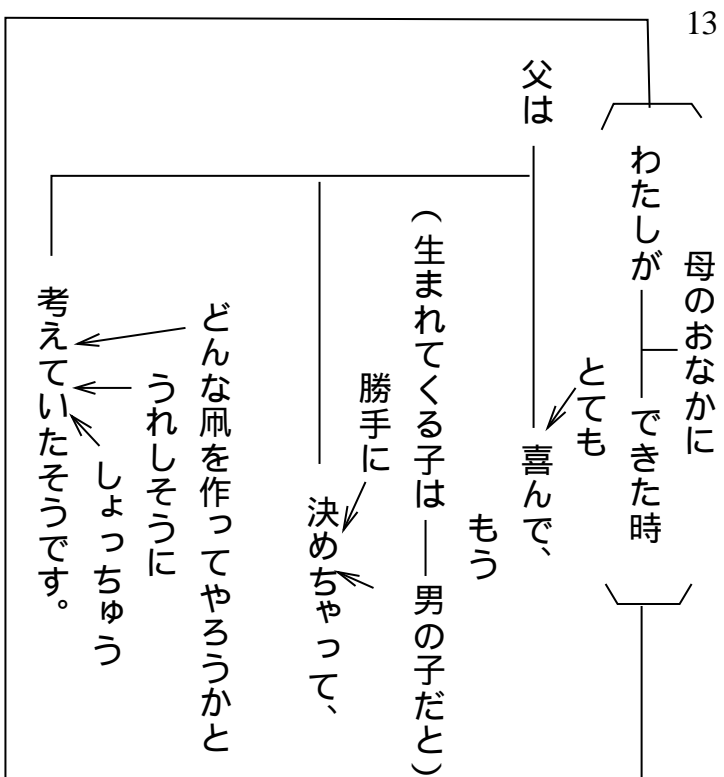
文 〳〵してやる)〳〵してあげる(

ア、だれかのために利益(得)になることをする

・ 友だちに消しゴムをかしてあげた。

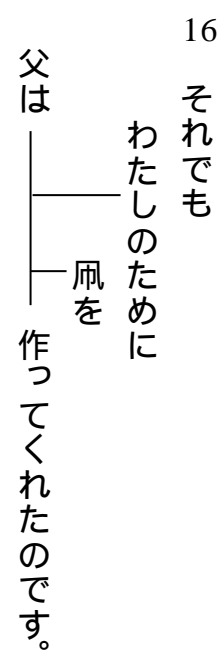
イ、自分の強い思い・決心をあらわす

・ この試合、ぜったい勝ってやる。



14 ところが、  
生まれたのが——わたしでしょ。

15 父が——  
どんなに  
がっかりしたことが。



17  
それが——  
この  
六角凧なんです。

文 しくしてくれる  
ア、自分(わたし)のために利益になるように、  
だれかがなにかをする  
・友だちが消しゴムをかしてくれた。  
イ、結果的に、自分の利益になること  
・早く雨がふってくれないかなあ。

類 しくしてもらおう

18 父は、武者絵ばかりかいていたものだから、女の子向けの絵を知りません。

19 考えに考えた末にかいたのが、この巴御前です。

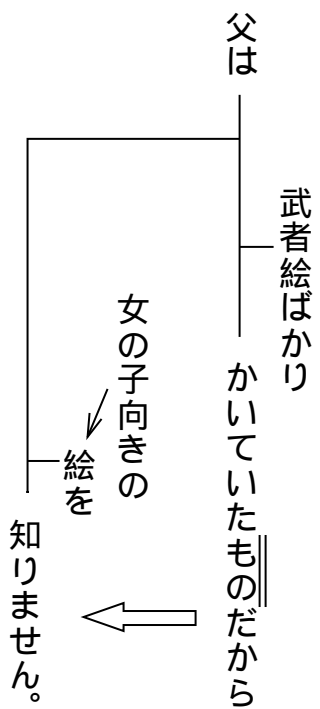
20 巴御前は、女ながらもよろいかぶとに身を固め、なぎなたふるって、寄せくる敵を、ばったばったとなぎたおしたという、勇ましい人です。  
(\*女なのに)

21 父ったら、まるで、その凧の絵に合わせるみたいに、わたしに友江と名前を付けたんです。

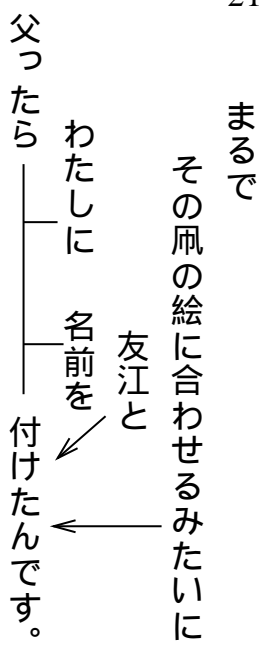
- 意 末
- 意 なぎなた
- 意 なぎたおす
- 意 勇ましい
- 意 身を固める



18



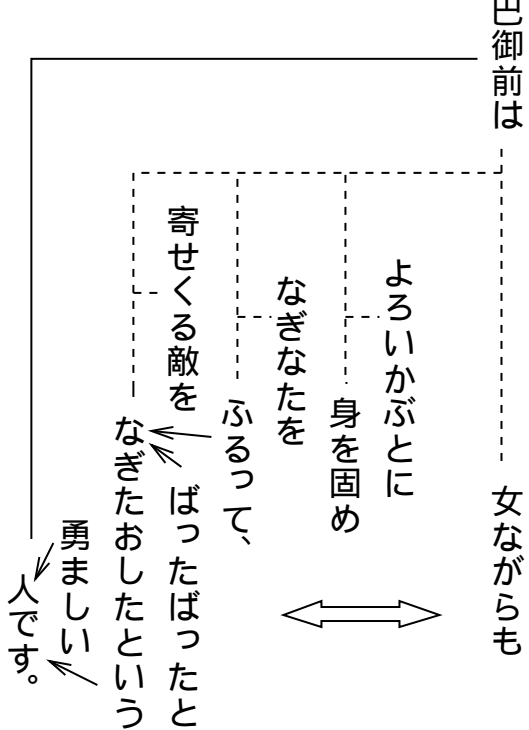
21



19

考えに考えた末に  
 「父が」——「かいたのが」——この  
 巴御前です。

20



文 ーだから

次に書いてあることの理由をあらわす。  
 「から」は、「わたし」の考えによる理由。

ーので

次に書いてあることの原因をあらわす。  
 「ので」は、「わたし」の考えとは関係ない原因。

22 わたしが生まれたころは、日本が領土ほしさから

意 領土

中国にせめこんで、その戦争が、だんだん大きくな  
 っていました。

23 ご近所でも、八百屋のおじさんや、とこ屋の兄さ

んや、ゆう便屋さんなどが、さっそく兵隊にとられ  
 たんですって。

24 そして、間もなく父も戦争に連れていかれちゃい  
 ました。



文 ーられる (受け身)

ア、犬がネコを追いかける。

ネコが犬に追いかける。

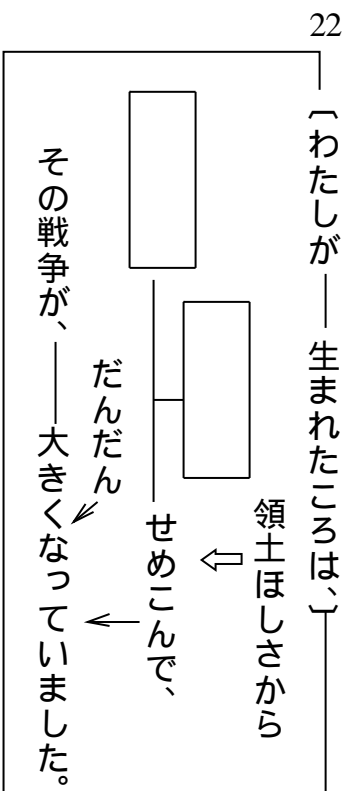
イ、花子がぼくの頭をたたいた。

ぼくは花子に頭をたたかれた。

ウ、雨にふられた。

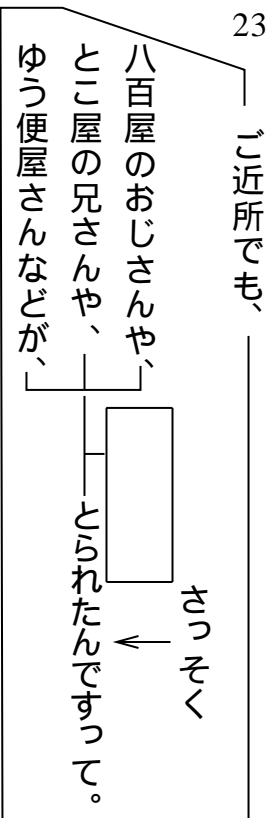
Q 次の文を受け身の文にしましょう。

父が弟をしかった。

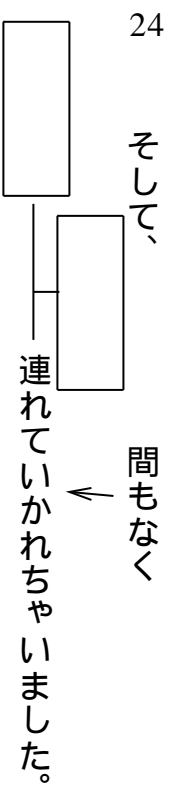


- 文 〳している
- ア、  
・犬が走る。  
・犬が走っている。
- イ、  
・お湯がわく。  
・お湯がわいている。

\* 戦争が大きくなる。  
戦争が大きくなっている。



- 文 〳に 「たくさん使い方がありません」
- ・ 兵隊にとる。
  - ・ 戦争に連れていく。



- ・ かべに絵をはる。
- ・ 友だちに会う。
- ・ ジャスコに行く。
- ・ 買い物に行く。
- ・ 信号が青になる。
- ・ ひでり続きに、花がかれた。

Q 23 24をもとの形の文にしよう。

25 生まれたての赤んぼのわたしをかかえ、女手一つで魚屋をやらなければならなかった母は、どんなに苦勞したかしれません。

意 女手一つ

意 てきばき

意 のけぞる

意 のん気

意 遺品

26 ユムの前かけをしめ、長くつをはいて、うるこのはりついたついで、てきばきと魚を切る母、その背中でのけぞって泣いていたわたし、そんなすがたを想像すると、今でもきゅんとむねがいたくなります。

27 ところが、父ときたららのん気なもので、兵隊として中国へ行ってまでも、凧たこを作っていたんですって。

28 そのことは、父が戦死した後、遺品をとどけてくれた戦友の青野さんから聞いて分かりました。

25 生まれたての赤んぼのわたしをかかえ、  
女手一つで魚屋をやらなければならなかった

母は、  
「どんなに  
苦勞したかしれません。」

26 ゴムの前かけをしめ、 長づつをはいて、

つらこのはりついた

うでで、

しぎばねと

魚を切る

その背中で

のけぞって

泣いていた

そんなすがたを

想像すると、

今でも きゅんと

(わたしは) むねがいたくなります。

27 ところが、

父ときたら のん気なもので、

兵隊として 中国へ

行ってまでも、

作っていたんですって。

刃を

28

父が—戦死した後、

遺品をとどけてくれた

戦友の

青野さんから

(わたしたちは) —聞いて

そのことは—分かりました。

29 父は、中国の少年がむかで風をあげているのを見つけると、すっかりこつぶんしちゃって、

それを手に取って見せてもらったそうです。

30 むかで風というのは、小さな円い風を何まいもつなげたものです。

31 風好きの父でしたが、むかで風を見るのは、初めてだったそうです。

32 風は日本だけのものではなく、世界じゅうどこにもあるんだというところを知った、父の感激

はどんなだったでしょう。

33 父が糸の付け方や、風と風のつなげ方や、バランスのととり方などを、あまり熱心にいつまで

も見ていたので、少年は、風を取られやしないかと心配したそうです。

意戦地	
意戦友	
意取り寄せる	

と結んだ、美しい女大将の顔……それが五十まい。

38 赤いよろいを着、なぎなたをかかえ、きりりとはちまきをしめ、目をつり上げ、口をきゅっ

37 父は、どんな短い休み時間ものがさずに、こつこつ働いて、五十まいもの凧を作ったそうです。

36 父は、あまりのうれしさに、なみだをこぼしたといいます。

35 隊長さんまでが、絵の具を取り寄せてくれたんですって。

や紙やひもなどをさがしてくれたそうです。

34 戦地では、凧作りの材料を集めるのも大変でしたが、父の熱心に戦友たちも協力して、竹

（父が）「見るのは」初めてだったそうです。

文くしてもらって  
主語にあらわされた人が、利益（サービス）を受けている。

31 凧好きの父でしたが、少年は、心配したそうです。

30 むかで凧というのは、つなげたものです。

父が 凧を取られやしないかと  
見ているので、

小さな円い

33 糸の付け方や、  
凧と凧のつなげ方や、  
バランスのとり方などを、  
あまり熱心に  
いつまでも

凧を 何まいも

父は、見つけると、  
すっきり  
「こつぶんしちゃって、  
それを 手に取って  
見せてもらったそうです。

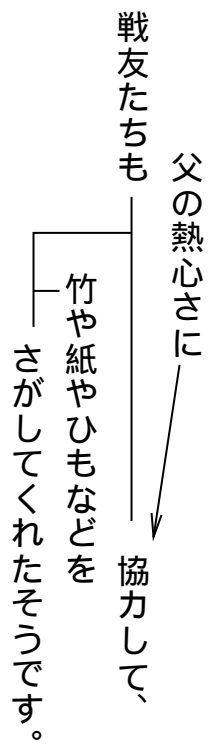
父の感激は、  
「どうことを知った、  
どんなだったでしょう。」

29 中国の少年があげているのを

32 凧は日本だけのものではなく、  
世界じゅうどこにも  
あるんだ

34

戦地では、  
 凧作りの  
 材料を集めるのも——大変でしたが、



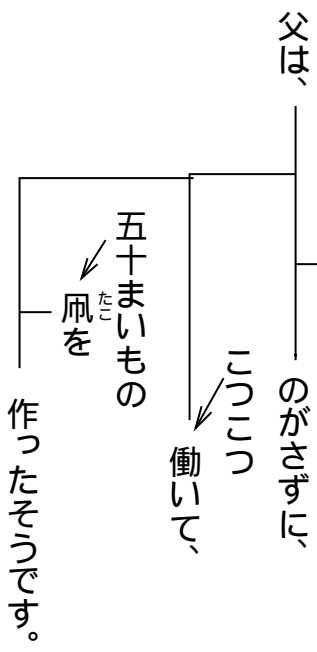
35 隊長さんまでが、「取り寄せてくれたんですって。  
 絵の具を

36 あまりのうれしさに、

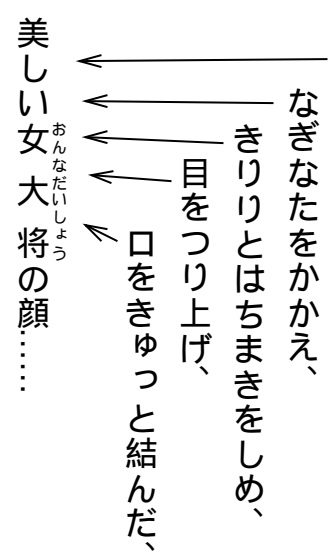
父は、——なみだをこぼしたといいます。

文 くが、く。(じなぎことば)  
 ア、雨がふっていたが、外で遊んだ。(くいちがい)  
 イ、二つあるが、どっちがいい？ (前提)

37



38 赤いよるいを着、



それが——五十まい。

文 くまで (とりたて)  
 きよくたんな例をあげて、強調する。

39 「父ちゃんは、日本に残したあたしたちのことを思いながら、——まい、——まい、心をこめて、

巴御前の、いいえ、友江の絵をかいただよ、きつと。」

と、母は、よく言ってたものです。

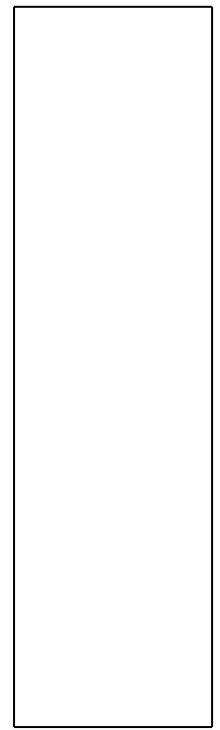
40 その凧をあげた時のそう観さといったら。

41 戦友たちは、みんな手をたたき、隊長さんもそう眼鏡でにこにこ見上げたんですって。

42 真っ青な冬の空にあがった五十まいの巴御前は、目鼻立ちこそ、少しずつちがってました

が、どの顔もとてもかわいらしかったといっています。

意 壮観 (そうかん)



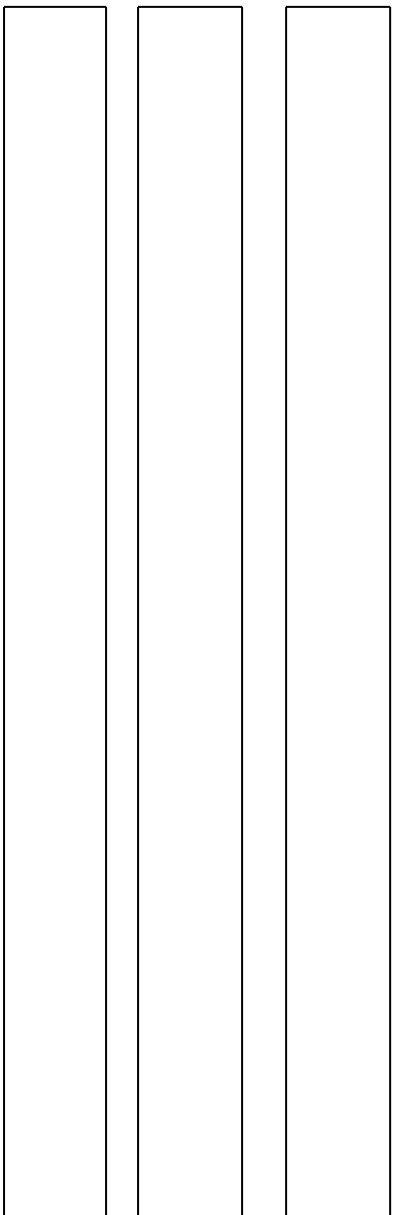
文 くしながら、く。(同時形)

ア、テレビを見ながら、ごはんを食べる。  
 イ、ごはんを食べながら、テレビを見る。  
 ・同時にしていることをあらわす。 述語  
 の動きが中心の動き。

意 国

意 神経痛

意 達者



- 48 凧を見ながら、兵隊たちは、いろんなことを考えていたといいます。
- 47 じいさんの神経痛がいたまなければいいが……。
- 46 おふくろは達者だろうか。
- 45 国の子どもたちも、凧をあげているだろうか。
- 44 戦友たちは、作業の合間に、それを見上げては、楽しんでいました。
- 43 巴御前の凧は、一日じゅうよくあがっていたそうです。

39

日本に残した  
あたしたちのことを

思いながら、

41 戦友たちは、  
みんな  
手をたたき、  
そう眼鏡で  
隊長さんも  
見上げたんですって。

42

真っ青な冬の空にあがった  
五十まいの

巴御前は、

少しずつ

目鼻立ちこそ、ちがっていましたが、  
とても

どの顔もーかわいらしかったといいます。

40

その凧をあげた時の

そう観さといったら。

母は、  
言っていたものです。

きつと。

「まい、まい、  
心をこめて、  
巴御前の、  
いいえ、友江の  
絵を  
かいたんだよ」と

文「こそ、」。とりたて  
ア、きみだからこそ、頼むんだ。  
イ、雨こそふらなかつたが、ひどい天気だった。  
・「こそ」がついている部分にかぎられ  
ていることをあらわす。

43 巴御前の

→ 凧は、

「口ごもりゆく

あがっていたそうです。」

44 作業の合間に、

それを

戦友たちは、  
見上げては、  
楽しんでいました。

↑ 国の

凧を

子どもたちも——あげているだろうか。

46 おふくろは——達者だろうか。

47 じいさんの

↓ 神経痛が

——いたまなければいいが……。

48

兵隊たちは、

↑ 凧を

いろんなことを

見ながら、

考えていたといいます。

49 夕方になって、父が凧をおるそうとした時です。

50 とつぜん、一発の銃声がひびき、たまが父のむねをつらぬいたんです。

51 父は、その場にばったりたおれ、父の手をはなれた凧は、ひもを引きずりながら、どこまでもどこまでも飛んでいってしまったそうです。

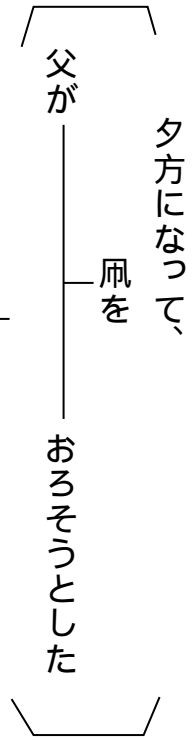
52 遠い山なみのみねに雪がかがやいていて、巴御前の凧は、夕焼けにそまりながら、ぐんぐん小さくなっていったそうです。

53 わたしは、その凧を見たわけではありませんのに、それが今でもはっきり見えるような気がします。

意 つらぬく

意 みね

文 ～しては、～する。  
ア、書いては、消す。  
・くり返しおこなうこと  
をあらわす。



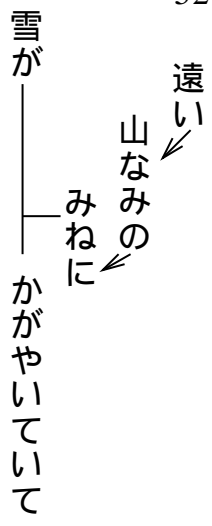
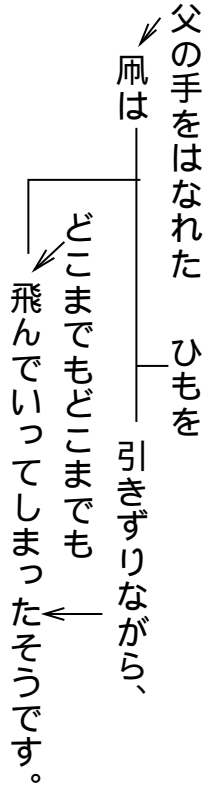
時です

一発の銃声が ひびき、

父のむねを

つらぬいたんです。

父は その場に たおれ、



巴御前の 夕焼けに

凧は そまりながら、

小さくなっていったそうです。

53 その凧を

わたしは 見たわけではありませんのに、

今でも はっきり

それが 見えるような気がします。

文 の に、

練習したので、うまくできた。

練習したのに、しっぱいした。

見たわけではないのに

見えるような気がする。

見たわけではないので



文 「〜して、〜する」と「〜し、〜する」

(比べてみよう)

- ア、風がふき、雨がふった。
- イ、風がふいて、雨がふった。
- ア、一郎はわらい、花子はおこった。
- イ、一郎は笑って、花子はおこった。

文 くしていく(遠のき)

- 1、とおのく動きをあらわす
- ア、ちよつと、うちへよつていきましよう。
- イ、母はわたしを病院までおんぶしていった。
- ウ、三郎は六年生の子にかかつていった。
- 2、動作や変化のありかたをあらわす
- ア、西の空が赤くなつていった。
- イ、きえていく白鳥のむれをみおくりました。
- 3、動きがつづくことをあらわす
- ・ 大丈夫、由美はだれとでもちゃんとくらして
- いけるよ。



54 子どものころは、父を殺したという中国の少年兵をどんなにうらんだかしれませぬ。

55 でもね、今考えると、その少年兵がどんなに腹を立ててたか、分かるような気がするんです。

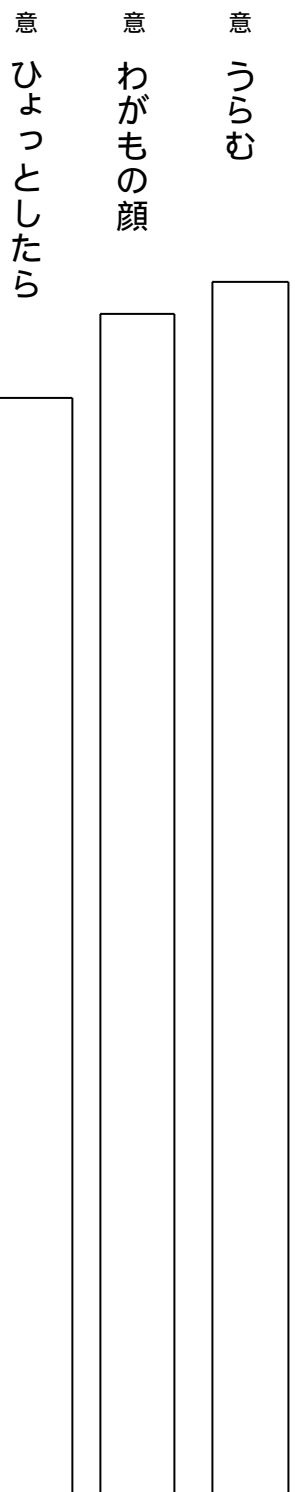
56 だって、敵の凧たこが、わがもの顔で、自分たちの空を飛んでいるんですもの。

57 ひょっとしたら、その人、自分の家族を日本軍に殺されたのかもしれない。

58 敵も味方もなく、世界の国々のいろんな凧たこが仲良くあげられたら、どんなにいいでしょう。

59 父も、きっとそれを望んでいたにちがいません。

60 この六角凧たこを見てみると、顔も覚えていない父の、そんな夢が伝わってくるような気がします。



58

54 子どものころは、

父を殺したという

中国の少年兵を

（わたしは）— うらんだかしれませぬ。

55 でもね、

少年兵が— 腹を立ててたか、— 分かるような

気がするんです。

56 だって、

わがもの顔で、

自分たちの空を

敵の凧たこが、— 飛んでいるんですもの。

57 ひょっとしたら、

自分の家族を

日本軍に

その人、— 殺されたのかもしれない。

敵も味方もなく、

世界の国々の

いろんな

凧たこが— 仲良く

あげられたら、

文 したらいい 希望をあらわす

59 それを

父も、— 望んでいたにちがいません。

60 この六角凧たこを

— 見ていると、

顔も覚えていない

父の— 夢が

— 伝わってくるような

気がします。

最初の場面を、もう一度読んでみよう。

- 1 どうですか、りっぱな風かぜでしょう。2 わたしの父が、作ったんです。
- 3 これ、わたしの、たからたからです。

Q 最後まで読んで、「こころの」「りっぱな」と「たから」の意味を、もう一度考えてみよう。

りっぱな

たから

どういふ物語だったか、整理してみよう。

・父はどんな人ですか。

仕事と風 お母さんにたいして わたしにたいして

・母はどんな人ですか。

お父さんにたいして 仕事にたいして わたしにたいして

・わたしはどんな人ですか。

・戦争とは、どういふものですか。

・家族とは、どんなものですか。(戦争中でも・・・)

・物語の中では、ずっと「父」になっているのに、題名は「父ちゃんの風」です。「父ちゃんの風」という題名からわかることはなんですか。